

# L. M. モンゴメリとテニスン

松 崎 慎 也

L. M. Montgomery and Tennyson

Shinya MATSUZAKI

## はじめに

幼い頃から文学好きだったルーシー・モード・モンゴメリ (Lucy Maud Montgomery, 1874-1942) は、1908年に世に送った『赤毛のアン』 (*Anne of Green Gables*) の中で、主人公アン・シャーリー (Anne Shirley) を自分と同じような文学少女として登場させている。アンはその活発なおしゃべりの中に様々な英米詩の引用を織りまぜるのが得意だ。そして、作者モンゴメリが、地の文でも引喩や引用を用いることから、アン・シリーズでは全体を通じて、文学作品への数多くの言及が見られる。

アン・シリーズ内で、どのような作者の、どのような作品からの引用、引喩がなされているのかに関しては、レイ・ウィルムシャースト (Rea Wilmshurst) の先駆的論文や、わが国では松本侑子によるアン・シリーズ翻訳に付された注釈および同氏の著書『赤毛のアンに隠されたシェイクスピア』などの研究があり、モンゴメリの創作法に光を当てている。ウィルムシャーストがまとめている、引用される作者別のインデックス部分で、それぞれの項をカウントしてみると、聖書が141回でトップ、続いてシェイクスピアが38回、第三位は、テニスンで30回となる (39-43)。テニスンは、引用回数でシェイクスピアにそれほど水をあげられてもいず、この数字はテニスンという詩人が、アン、アン・シリーズおよび作者モンゴメリにとって重要な詩人であることを示しているように思える。

アン・シリーズの中のテニスンへの言及で特に印象的なのは、『赤毛のアン』の第28章の、アンたちが学校でテニスンの「ランスロットとエレイン」 (“Lancelot and Elaine”) を習ったことから、エレインの遺体を乗せた船が川を行く一節を芝居にして演じる場面だ。この場面に関しては、松本氏の上記著書の第三章や、『赤毛のアン・夢紀行』内の高宮利行による一章など、論考も目立つ。本論の目的は、その場面以外にも小説内に度々登場する、テニスンからの引喩、引用、テニスンへの言及が、どのようにアン・シリーズ内で用いられているのか、その機能的側面を考察することである。

ウェンディー・E・バリー (Wendy E. Barry) らが編集した詳注版『赤毛のアン』に添えられた付録において、マーガレット・アン・ドゥーディー (Margaret Anne Doody) とバリーとが行う、引喩・引用に関する考察では、テニスンは、『赤毛のアン』内で、最終的に否定されていくイメージを提供する機能を果たしていると論じられている (460-61)。

たしかに、アンは “It would have been such a romantic experience to have been nearly drowned.” (87-88) と述べていたものの、第十四章の最後で、上記のエレインごっこ遊びは、エレイン役に推されたアンが、乗り込んだ船に空いていた穴からの浸水で溺れそうになり、結局、“And to-day’s mistake is going to cure me of being too romantic. I have come to the conclusion that

it is no use trying to be romantic in Avonlea. It was probably easy enough in towered Camelot hundreds of years ago, but romance is not appreciated now.” (184) と、アンは反省するわけだから、テニスンが提供するロマンス性や、現実を離れた芸術世界のみで可能な理想というものは、作品内では遠ざけられていくもののように見える。しかしながら、アン・シリーズ全体を見渡せば、テニスンが作品内で負わされている機能はそれだけにとどまらないように見える。本論では、ドゥーディーらが指摘している以外の機能を論じていきたい。

以下、第一章では、モンゴメリの伝記的情報をたよりにして、モンゴメリ自身のテニスン観を確かめる。作者自身は、テニスンに対して、甘美すぎる詩人と、不満を漏らしているものの、本論の第二章で論じることになる、テニスンの、小説内で担う機能と照らし合わせてみると、この、モンゴメリ自身のテニスン評は、作品内のテニスンの位置とは独立してあるということがわかる。

第二章で行う、アン・シリーズ内でのテニスンの機能に関する考察からは、テニスンの詩句が象徴性を帯びるように用いられ、ときに作品構成上、重要な「装置」として働き、物語の設定でも一翼を担っていることが見えてくる。本論考が、モンゴメリの創作法の一側面を理解する一助になればと願う。

## I

まず、モンゴメリの自伝と日記の記述から、モンゴメリ自身がテニスンをどのように読み、どのように評価していたのかを追う。モンゴメリにとってテニスは生涯、愛読し続けた詩人であった。しかし、その評価としては、多少の揺れは見せるものの、快いだけの詩人という感じを常に抱いており、テニスを最高の詩人とは見なしていなかったようだ。

自伝によると、モンゴメリは六歳の夏から学校に通い始め、読み書きの教科は、その教科書にあたるロイヤル・リーダーズの二の巻（六つにグレード分けされた二番目）から習い始めた (*Alpine* 27)。ロイヤル・リーダーズは四の巻に上がると、テニスン作品からは初めて「メイ・クイーン」 (“The May Queen”) が登場するので、テニスンの詩に触れ始めたのは、この頃のことであつたろう。

バリーら、詳註版『赤毛のアン』の编者たちは、その註においてアン-モンゴメリ時代のプリンスエドワード島州で使用されていたロイヤル・リーダーズは、恐らく、トマス・ネルソン (Thomas Nelson) 社版に基づいて、ハリファックスのマッキンレー (MacKinlay) 社から出版された1875年版であろうと記している (89)。上記1875年版ではないが、インターネット上の、オープン・ライブラリー (*Open Library*) およびメモリアル・ユニヴァシティ (*Memorial University*) のアーカイブサイトにはそれぞれ、1880年代のマッキンレー社版と1900年初めのネルソン社版が公開されており、バリーらの示す参照ページ数と多少のずれはあるものの、掲載作品の一致から、四の巻以降のロイヤル・リーダーズにおけるテニスン詩の登場の状況を推測することができる。

上記アーカイブで見ると、テニスン詩は、四の巻に、先にも触れた一作品、五の巻に四作品——「小川」 (“The Brook”)、 「クレア嬢」 “Lady Clare”、 「グィネビア」 (“Guinevere”) からの抜粋、 『イン・メモリアム』 (*In Memoriam*) からの抜粋——が、六の巻には二作品——「軽騎兵旅団の突撃」 (“The Charge of the Light Brigade”)、 『王女』 (*The Princess*) 中の一挿入歌「角笛の歌」 (“Bugle Song”) ——が掲載されている。それらの内、アン・シリーズで引用されるのは、六の巻に載る「角笛の歌」のみである。アン・シリーズ内のテニスン引用と、ロイヤル・リーダーズ掲載のテニスン作品とは、ほぼ重なっていないことになる。これは、モンゴメリが自伝で述べているように、幼少期を過ごした、母方の祖父母マクニール家の蔵書中であつて、熱心に読んだ詩人たちの本の一つにテニスン詩集があり (*Alpine* 49)、その幼い日以来、幅広くテニスン詩に親しみ続けていたことを

示しているのだろう。日記に記しているように、ダルハウジー大学の聴講生だった1896年、フィラデルフィアの雑誌社に送った短編の原稿が採用され、初めての原稿料5ドルを受け取ったときに、自分へのご褒美として買ったのは、ずっと欲しかった四冊の美装丁詩集で、その一冊がテニスン詩集でもあった(1889-1900 314)。

モンゴメリのテニスン評が、その日記中に幾つか記されている。一日テニスンを読みふけていた1909年9月4日の日記では、“I like Tennyson, although I cannot think he is a supremely great poet.”(1901-1911 236)と語り、テニスンを、愛する詩人の最高位には置いていない。また、評言に比喻を用いながら、テニスンには快い人工的に整備された庭があるばかりで、荒野があまりないと述べてもいる(1901-1911 237)。一番の詩人というのは、“the poet who hurt me”で、この時点のモンゴメリに一番ひどい痛みを与えるのは、ロバート・ブラウニングだとしている(1901-1911 237)。

1915年になって、テニスンは痛みを与える詩人に変わる。1912年に長男を出産して母になったモンゴメリは、1月17日の日記に、絞首刑にされた息子の呼び声を風の中に聞く老母を描いた、テニスンの「リツパ」(“Rizpah”)を再読して、詩中の、子を失った母親の苦悩に触れて痛みを覚えたことと記し、かつて“Tennyson never hurt me”と述べたことがあるけれど、それは母親になる以前のことであったと省みてもいる(1910-1921 162)。

1935年11月22日の日記では、再びテニスンはモンゴメリにとって甘美すぎる詩人に戻っている。「角笛の歌」や「砕けよ、砕けよ、砕け散れ」(“Break, break, break”)という不滅の詩行を物してもいるが、しかし後者の詩であっても、カナダの詩人チャールズ・G・D・ロバーツ(Charles G. D. Roberts, 1860-1943)の、「灰色の岩と、それよりも濃い灰色の海」(“Grey rocks and greyer sea”) (同じく哀惜をテーマにしている)よりも優れているとは思えないと述べている(1935-1942 47)。

このようなモンゴメリ自身のテニスン評は、以下で確認する、アン・シリーズの中でアンやアンの家族たちが抱いているテニスンへの感想とは異なっている。作品内では、作者の評価とは離れた形で、詩人テニスンとテニスン詩は、独自の機能を負うように用いられている。次章では、その機能について考察する。

## II

ウィルムシャーストが掲げる、『赤毛のアン』から『炉辺荘のアン』(Anne of Ingleside, 1939年出版)までの8作品の引用リスト内をカウントしていくと、テニスンの引用数は、創作年代順で、2、3、4、9、1、1、7、4と推移する。アン・シリーズでは、1936年の『アンの幸福』(Anne of Windy Poplars)と『炉辺荘のアン』が、後から時代を遡って間の時間を埋めるように物語が書き継がれ、出版されているので、先の数字を物語内の時間の流れで配列し直すと、2、3、4、7、9、4、1、1となる。

上の、創作年代順のテニスン引用数を作る波型の変遷と、物語内時間順を作る山型の変遷は何を示しているのだろうか。テニスン引用に関してウィルムシャーストも、この数字の変化の理由が問題にされるべきであることを確認してくれている(17)<sup>1</sup>。ここで、二様の数字の並びを対照しながら考えてみると、まず言えるのは、第一章で見た、ほぼ変わらぬモンゴメリのテニスン観を考慮すると、数値の変化が作者モンゴメリ個人の興味や生活の変化と結びつけられるような傾向らしきものを帯びているとは言えない、ということである。以下、根拠を挙げつつ主張するつもりであるが、テニスン引用数の多少は、それぞれの作品構成上の必要性・意図により変化していると考えられる。

アン・シリーズ内に登場するテニスンからの詩句の用いられ方を一つ一つ見ていくと、どれもが

作品構成上、顕著に機能しているというわけではなく、特別な象徴性は帯びずに常套句的に軽く用いられているケースもある。それに対して、明らかに機能性が読み取れる場合、詩人テニスとテニス詩が示唆していると考えられるものは、抽象すると、ロマンス、幻想、悲劇の三つである。

ロマンスとは、アン・シリーズ内において、現実と離れた空想、夢想、武勇、冒険、そして、理想の恋人との出会い（及び結婚）、または悲恋をも含む、幅広い言葉・イメージであり、テニスとの関わりにおいても、そのような幅を持って象徴的に用いられている。先に見た、エレインごっこで、少女たちはエレインの悲恋に心揺さぶられていたわけであるが、溺れかけたアンが否定しようとするロマンスとは、空想という意味を主にして用いられているのだろう。先に引用した、アンの反省の弁に続く、養父マシュー・カスバート (Matthew Cuthbert) からの、“Don’t give up all your romance . . . a little of it is a good thing—not too much, of course—but keep a little of it, Anne, keep a little of it.” (*Green Gables* 184) という、この人物を考えると意外とも感じられ、それがかえって意味深長に響く、この発言中のロマンスとは、理想の恋人との出会いを夢見ることを主として意味しているようだ。

テニス詩が幻想性を醸し出すのに用いられている例は、『アンの青春』(*Anne of Avonlea*, 1909年出版)の第21章におけるラヴェンダー・ルイス (Lavendar Lewis) との出会いの場面に現れる。友人から土曜の夕食に誘われた、アンと親友のダイアナ・バリー (Diana Barry) は友人宅まで4マイル弱の道を歩いて行くことにするものの、途中で道を間違えて、ラヴェンダーの住む「こだま荘」(Echo Lodge) に偶然辿り着く。「こだま荘」に近づく小径でアンは早くも “We shall presently come to a palace with a spellbound princess in it, I think.” (244) などと言って、いつものように想像をたくましくしているのだが、「こだま荘」と称せられる由来を実際に体験してもらおうと、ラヴェンダーが「こだま荘」四代目のお手伝いの少女シャーロット四世 (Charlotta the Fourth) に庭に出て角笛を吹かせたときに、角笛の音に返すこだまは、“from the woods over the river came a multitude of fairy echoes, sweet, elusive, silvery, as if all the ‘horns of elfland’ were blowing against the sunset.” (251-52) と、テニス詩の「角笛の歌」中の、こだまを形容しての語句「妖精の国の角笛」(10) に触れながら語られる。この引用も働いて、「こだま荘」および、このラヴェンダーのエピソードには幻想性の彩りが加えられている。

同じく『アンの青春』から、テニス詩が象徴するものの、もう一つである悲劇の要素を見てみたい。一つは、死んだと思われている男が故国へと帰還する、悲劇的物語詩『イノック・アーデン』(*Enoch Arden*) 中の語句 “things seen are mightier than things heard” (762) (妻と子どもが再婚した男と幸せそうに暮らす姿をイノックが目撃したときの心情を表す) が引用される箇所、もう一つは、アーサー王がアヴァロンをめざして死の旅へと赴く場面を描く「アーサー王の死」(“Morte d’Arthur”) 中のアーサーの言葉 “The old order changeth, yielding place to new” (240) が引喩となっている箇所である。

そこでは、これら悲劇性を帯びた作品を引用することによって、周囲が変わっていくことに対してアンが感じている心の痛みを印象づけている。アンと仲間たちは、自分たちの住むアヴォンリー (Avonlea) 村の美化を目指す「アヴォンリー改善協会」(The Avonlea Village Improvement Society) を結成する。親友ダイアナと、その協会のメンバーの一人であるフレッド・ライト (Fred Wright) が恋に落ち、二人の姿を目撃したときのアンの印象が、「イノック・アーデン」の詩句を引きながら、“as ‘things seen are mightier than things heard’, or suspected, the realization that it was actually so came to her with almost the shock of perfect surprise.” (356) と語られる。また、偶然の出会いから親友となったラヴェンダーの結婚式の日、アンが大学進学のためアヴォンリーを去る日、隣人のレイチェル・リンド (Rachel Lynde) が養母マリラ・カスバート (Marilla Cuthbert)

とグリーン・ケーブルで同居するために引っ越してくる日、村のアラン (Allan) 牧師夫妻が去る日、それらの時が迫っているときのアンの心情が、上のアーサーの言葉を用いながら、“The old order was changing rapidly to give place to the new, as Anne felt with a little sadness threading all her excitement and happiness.” (361) と語られる。

ここまで見たような、場面や人物の心情の、印象づけや強調の他に、テニスが一つの作品の構成全体に関わる機能を持って用いられている作品が二つある。一つは1915年出版の『アンの愛情』

(*Anne of the Island*) で、作品はまず、題辭に、お伽噺『眠り姫』に基づく、テニスの「白日夢」(“The Day Dream”) の第九部 (王子の到着を意味する THE ARRIVAL というタイトルが付されている) の冒頭の四行、“All precious things, discovered late, / To those that seek them issue forth; / For Love in sequel works with fate, / And draws the veil from hidden worth.”

(1-4) を引いてスタートする。この巻の終わりで、結局ここまで、同級生ギルバート・ブライズ (Gilbert Blythe) とアンの、紆余曲折のあったロマンスもハッピーエンドをむかえる。そのようなわけで、シリーズ中最もロマンス性が濃く感じられるこの作品は、最終章もテニスの劇的独白詩「ロックスリー・ホール」(“Locksley Hall”) (詩中で回想される、話者の恋は、結局、失意に終わるのだが) からの “Love took up the glass of Time” (31) という、愛し合う時が始まったことを意味する詩句が、章タイトルとして用いられている。

アンとギルバートが進学したレドモンド大学 (Redmond College) での生活が描かれるこの巻では、大学の勉強会でアンがテニスについての発表をするなど (230)、大学でアンがテニスを学び、研究していることがわかる。このように、『アンの愛情』では、テニスは小説全体に渡ってロマンス性を醸し出す役割を担い、しかもそのロマンス性は否定されてはいない。

作品のもう一つは、1917年出版の『アンの夢の家』(*Anne's House of Dreams*) で、この作品はシリーズ中、テニスからの引用が最も多い巻でもある。また、テニスの同じ作品から繰り返し引用されてもいて、劇的独白詩「ユリシーズ」(“Ulysses”) から二回、テニス辞世の詩と俗に言われる——この巻でもそう見なされている (266) ——「砂州を越える」(“Crossing the Bar”) から三回引かれている。

これらはすべて、この巻の主要人物で、結婚したアンとギルバートが移り住む漁村フォー・ウィングズ (Four Winds) で灯台守をする、かつて船乗りだった老人、数々の冒険に満ちた人生を送った、ジム船長 (Captain Jim) ことジェイムズ・ボイド (James Boyd) に関わるものだ。このジム船長のような船乗りの冒険心を代弁するものとして、「ユリシーズ」の “sail beyond the sunset, and the baths / Of all the western star, until I die” (60-61) の行を踏まえたセリフがアンによって繰り返される。ジム船長自身、テニスを読んでもいる (79, 131)。物語の終盤、ジム船長が死を迎える場面では、「砂州を越える」が度々登場する。己の死期が近づいていることを感じているジム船長の頼みで、アンは「砂州を越える」を暗唱する (266)。聞き終えたジム船長は、“He [Tennyson] wasn't a sailor, you tell me—I dunno how he could have put an old sailor's feelings into words like that, if he wasn't one. He didn't want any 'sadness o' farewells' and neither do I, Mistress Blythe” (266-67) と述べる。ジム船長の人生の幕が閉じるというこの巻の主要な筋の一つが、船出 (冒険と死を意味する) を描くテニス詩を一道具立てとして用いて構成されているのがわかる。

創作年代順で見ると、テニス引用数は、この『アンの夢の家』でピークとなり、続く、1919年の『虹の谷のアン』(*Rainbow Valley*) と21年の『アンの娘リラ』(*Rilla of Ingleside*) で、それぞれ一つずつと引用数は落ち、『アンの幸福』(*Anne of Windy Poplars*) では、七と再び跳ね上がる。『虹の谷のアン』と『アンの娘リラ』は、アンの子どもたちが物語の中心であるため、道具立てとしてのテニスは機能面での特別な役割は担わされてはいない。

『アンの幸福』では、『虹の谷のアン』と『アンの娘リラ』から時代を遡って、ギルバートとの結婚前の婚約期に、サマーサイド高校の校長を勤めるアンからギルハードへ送られた手紙によって、この巻の大部分が構成されている。『炉辺荘のアン』の中で触れられるように、ギルバートはアンに、(いつ頃のことであるかは不明だが) テニスン詩集をプレゼントしている (232-33)。このことも考え合わせると、ギルバート宛の手紙の中で、情景描写に “the wind is blowing ‘in turret and tree” (Poplars 38) などと、テニスンの1832年詩集所収の「姉妹」(“The Sisters”)の三行目を当然の言葉遣いのように引いているのは(ウィルムシャーストは、ここを『イン・メモリアム』からの引用としているが誤認)、小説の設定として、テニスンが二人の間の「共通言語」となっていることを示唆しているのではないだろうか。

別の手紙では、部屋の窓の外に見える、星空の下の家並みを見ながら、“It is ‘a dreaming town.’ Isn’t that a lovely phrase? You remember . . . ‘Galahad through dreaming towns did go?’” (Poplars 61) としたため、レドモンドで共に学んだギルバートが、テニスンの「サー・ガラハッド」(“Sir Galahad”)の詩行(原詩の50行目)をまだ記憶しているか尋ねている。ギルバートの方でもテニスンを長く愛読しているらしき様子は、『アンの夢の家』で、知人の手術を巡って意見対立するアンへの説得のため、“an authority” (225)として、テニスンの「イノーニー」(“Enone”)から “because right is right, to follow right / Were wisdom in the scorn of consequence” (147-48)を引くことから垣間見える(225)。アンとギルバートはテニスンを使ってコミュニケーションをとっている。テニスンは、二人の心を結ぶ詩人として設定されていると考えられる。

### おわりに

本論では、アン・シリーズ内における、テニスンの象徴性、小説の構成上および設定上担わされている、テニスンの特別な機能について考察してきた。本論では考察の対象は、テニスン引用に限ったわけであるが、モンゴメリの創作法の一側面を理解するために、引用、引喩に着目する方法は、他に、他の詩人、作家ではどうなのか、また、アン・シリーズ以外のモンゴメリ作品ではどうなのか、など適用の余地は多く残っている。それらについては今後の課題としたい。

### 註

- <sup>1</sup> ウィルムシャーストは、『アンの娘リラ』で聖書からの引用数がシリーズの他の作品より跳ね上がっていることに関して、モンゴメリの夫の牧師としての活躍期という伝記的な事実と並べて、そこに要因を求めている(17)。しかしながら、作品内の機能という観点からの分析では、例えば、聖書引用は、どの人物の口からなされるのか、とか、第一次世界大戦という、作品の重要な背景と関わりはないか、といった部分にも注意を払う必要があり、その場合、聖書引用の多さについては(ここでは論じられないが)、別の説明も可能かもしれない。

### 引用文献

- Barry, Wendy E., Margaret Anne Doody and Mary E. Doody Jones, ed. *The Annotated Anne of Green Gables*. By L. M. Montgomery. New York: Oxford UP, 1997.  
*Memorial University: Digital Archives Initiative*. 27 Aug. 2013 <<http://collections.mun.ca/index.php>>  
 Montgomery, Lucy Maud. *Anne of Avonlea*. London: Penguin, 2009.

- . *Anne of Green Gables*. Ed. Mary Henley Rubio and Elizabeth Waterston. New York: Norton, 2007.
- . *Anne of Ingleside*. New York: Bantam, 1998.
- . *Anne of the Island*. London: Penguin, 2009.
- . *Anne of Windy Poplars*. New York: Bantam, 1998.
- . *Anne's House of Dreams*. London: Penguin, 1994.
- . *Rainbow Valley*. New York: Bantam, 1998.
- . *Rilla of Ingleside*. New York: Bantam, 1998.
- . *The Alpine Path: The Story of My Career*. 1917. Markham: Fitzhenry and Whiteside, 2003.
- . *The Complete Journals of L. M. Montgomery: The PEI Years, 1889-1900*. Ed. Mary Rubio and Elizabeth Waterston. Don Mills: Oxford UP, 2012.
- . *The Complete Journals of L. M. Montgomery: The PEI Years, 1901-1911*. Ed. Mary Rubio and Elizabeth Waterston. Don Mills: Oxford UP, 2013.
- . *The Selected Journals of L. M. Montgomery, 2: 1910-1921*. Ed. Mary Rubio and Elizabeth Waterston. Toronto: Oxford UP, 1987.
- . *The Selected Journals of L. M. Montgomery, 5: 1935-1942*. Ed. Mary Rubio and Elizabeth Waterston. Don Mills: Oxford UP, 2004.
- Open Library*. 27 Aug. 2013 <<http://openlibrary.org>>
- Tennyson, Alfred, Lord. *The Poems of Tennyson*. Ed. Christopher Ricks. London: Longman, 1969.
- Wilmshurst, Rea. "L. M. Montgomery's Use of Quotations and Allusions in the 'Anne' Books." *Canadian Children's Literature* 56 (1989): 15-45.
- 高宮利行「アンと『エレインごっこ』」『赤毛のアン・夢紀行——魅惑のプリンス・エドワード島』東京：日本放送出版協会，1989，58-62.
- 松本侑子，訳『赤毛のアン』L・M・モンゴメリ作，東京：集英社，2000.
- 『赤毛のアンに隠されたシェイクスピア』東京：集英社，2001.
- ，訳『アンの愛情』L・M・モンゴメリ作，東京：集英社，2008.
- ，訳『アンの青春』L・M・モンゴメリ作，東京：集英社，2005.